

日時：平成28年7月7日(木)9：20～12：20  
場所：多摩市立図書館本館 閲覧室  
出席：多摩市立図書館：図書館員 60人  
寺田大塚小林計画同人：寺田、小林

多摩市のライブラリーシステムのこれまでとこれから

話題01、図書館員から基本構想策定委員会につたえたいこと。

(政策としての図書館基本構想立案の本当の当事者は多摩の図書館員。)

①プロポ提案 と 地域図書館廃止を聞いた市民からの存続要望のチラシを考える。

②廃止問題に揺れる分館 の 現状と将来像 を議論する。

(新しい中央館が生まれた後に、どんな利用分布に変化するのか。  
駅前の三越やイオン、身近にのこるコンビニ、魅力の棲み分け。  
地域館から縮小されるニーズ、残るニーズはなんだろうか。)

- 本館の求心力に吸い寄せられたあとに何が残るのか。誰が守るのか。
  - ・40年多摩の図書館と生きた想いの蓄積。自分史群の宝。
  - ・お年寄りや若い母と子の、コミュニティの出会いの場。
  - ・図書館として残る意味・・・今日も孫に絵本を読むなら地域館
- 諏訪の分館が廃止された
  - ・あとさきに、判ったこと。
  - ・得たこと
  - ・失ったこと

- 本館の求心力に吸い寄せられたあとに何が残るのか。誰が守るか。
  - ・利便性と近隣性に特化・目的化か。
  - ・夜間/長時間開館に低廉にこたえて、民間活力に委譲の場か。
  - ・近隣連携/アウトリーチサービスと絶縁しスタンドアロンか。
- 唐木田館が駅拠点館だと  
言われない(成らない)訳。
  - ・非効率/無用手前なのか
  - ・中途半端/成長が無いか

③多摩市の生まれ変わる図書館のありかた を議論する。

(資料世界の構造化・組み立てる編集者表現者としての図書館員  
・ブラウジング、エコロジカルラーニングに図書館の存在意義を  
・マーク典拠の重要性・多摩の図書館事業費は高いというけれど)

話題02、図書館員として本館立ち上げに立ち会うということ。

(図書館本館と全体システム再出発のかたちや質は多摩の図書館員次第。)

①図書館員の専門性と成長性をはぐくむ仕組み を考える。

(図書館員としてのこれまで、これから守るべきこと・変わるべきこと。  
松本、常世田両先生ほかへの、中堅職員研修のテーマ/全員研修の形)

②「わたしたちの図書館」から「わたしの図書館」になること。

(市民の使うことばの深度の変化に気づく。「私の図書館」になること、  
そうありつづけることのむずかしさ。)

③「図書館員になる」とき。図書館員に化成させる出会い。

(大澤正雄さん80歳が語る「私が図書館員になったとき」。  
私たちが出会った「図書館員が震えたというはなし」。  
図書館員が豊かで魅力である時に、図書館が成長するのだとしたら。)

唐木田・豊ヶ丘・聖ヶ丘・東寺方 地域館のいま、そして再編後について

- 図書館を建てている時代は、中学校区単位の考え方があった。  
豊ヶ丘などは、子どもよりリタイア世代の利用が多いように思う。  
少子化時代の子どもたちになにができるか考えているところ。
- 場を基にした人と人の繋がりが残っていくと思う。
- 存続要望が出て、歩いていける距離にある、身近に必要として使っていてくれる人がいた、と思った。
- 地域館がなくなったとして、どのようにサービスを維持していくか考えた。サービスポイントで良いのか。
- ベビーカーを押してお話を聴きに来られる、二世帯利用者もいる。
- 車いすや杖をついて来られる利用者。窓口で予約補助をして利用される方もいる。
- 外部委託：学校や複合施設との連携は職員でないとできない。
- 聖ヶ丘では障害者施設の先生と相談をしてサービスを行っている。
- 地域館が多摩市の良いところだと思う。  
再編整備のながれで閉館していくかもしれないと諦めていたが、  
地域密着が図書館の大切な要素だと思う。
- 利用者の年齢層が高くなってきた。拠点館や本館が遠く、アクセスが悪いことによって利用が少なくなるのであれば、規模が小さくなくても地域館を残してニーズに応えたい。ニーズは変わるかもしれないが。
- 唐木田図書館について  
多摩市で初めての委託運営、住民が多くないので地域館として作られた。  
規模が小さいので拠点館にするなら建て替えが必要。  
本館がここになれば唐木田図書館はもっと利用されていただろう。  
本館を利用する人も多いが、親子づれや高齢者の利用は多い。  
学生で勉強している場所利用が多いので、開館時間延長要望が多い。

- 開館時間を変える工夫ができると良い。利用者の滞在時間は長いが  
コミセンのスペースにいる時間が長い。
- 東寺方図書館は高齢者が早い時間からいる。中高生がほとんど来ない。  
開館時間を長くすればティーンズの吸い上げになるか、考えている。  
福祉館への働きかけも始めている。
- 利用者の年齢構成が変わっていて高齢者が多い。若い世代は活字離れ。
- 聖ヶ丘図書館利用者、穏やかな人が多いがチラシが出るほど利用してくれている人がいた。3世代で利用する人もいる。子どもの図書館員体験を指定して申し込む方もいる。
- コミセンと図書館で居場所の違い。開館と同時に座席が埋まる。本を借りずに毎日開架室に来る方もいる。
- 他市の公民館図書室との違い、多摩市の地域館は職員が人と本を繋げている。
- 地域館ごとに企画展示があり、工夫をしている。唐木田図書館の展示は人気があるようだ。
- 東日本震災の時にしばらく休館をしたが、普段は開いている図書館が閉館していることに不安を感じた、と何人かの利用者に言われた。
- 図書館は、誰でも目的がなくても安心して行くことができる場所で  
そういった場があるようにしたい。

関戸・永山 拠点館のいま、そして再編後について

- 拠点館は3館、それぞれ蔵書は10万冊程度。レファレンスを担っている。レファレンス本は最新刊を永山に、少し年度が古くなったものを関戸に置くようにしている。相談業務は多い。インターネット環境の充実で図書館に寄せられる複雑な調査依頼は減っているように思う。  
今後、本館が整備されていいくと機能が移っていくかと思う。
- 夜間開館は、乗降客数調査を参考にして決めているが、毎日やるか考えていく必要があるように思う。
- 拠点館ごとに特徴・違いがある。本館は滞在型になっていくと思う。  
多摩市の図書館は滞在型の利用が多い。

移動図書館の復活は、宅配サービスへの動きは

- 永山図書館で宅配サービスを行っている。宅配ボランティアに依頼。受け取り場所に地域館を使うことがある。現在は永山に集約しているが地域館でもできると思う。以前は旧本館でやっていたが、永山が郵便局に近い、障害者サービスの利用者が多いなどの理由でやっていた。
- 宅配サービスで老人ホームに行っている。図書館利用者だった入所者の個人的な要望から始まったものだが、数名に広がっている。配本車で行って自由に選んでいただくのもできるかと思う。
- 宅配サービスは厚生施設(デイケアセンター)などからも要望がある。
- 移動図書館は、職員からの意見としてはでてこない。コストがかかる、利用者が時間に合わせないとならない、雨の日は利用が少ない等。
- 移動図書館は、地域の受け皿・要望がないと復活しにくいだろう。

多摩市立図書館本館のいま、そして新館について

- 駐車場
  - ・現在は20台。休日はいっぱい。現在は止め放題で道路に列ができています。ちゃんと管理しているかと利用者聞かれる。
  - ・今は図書館利用者でない車が停まっていることもある。本来の図書館利用者が停められない状況もある。
  - ・ショッピングセンターなど近隣の民間施設と提携しても良いのでは。
- 本館の書庫
  - ・自動書庫は反対。蔵書管理ができなくなる。廃棄保存会議でうまく管理ができていくと思う。
  - ・インターネット予約ができるようになって、古い資料も動くようになってきた。

- ICTタグの導入
  - ・コストを含めて検討すべき。導入したからといって、業務量は減らないと思う。
  - ・導入することによって不明資料の減少に多少は役立つかと思う。
  - ・遡及は。現在の総蔵書数は75万冊程度。
  - ・導入した他自治体などにヒアリングをして研究してはどうか。

- あたらしい本館のめざすサービスと構築される資料世界の像は。
  - ・ICT, ICTチップ、自動化書庫、効率性、省力性、技術志向。
  - ・構造化された資料世界表現、配架分類、複層典拠、本籍、副本。
  - ・古くて新しい課題：ブラウジングとエコロジカルラーニング。

- 学ぶことは変わる(林竹二)
  - ・図書館員が学び変わり続けることが、図書館が成長することの種。
  - ・組織として学び変わる質の大切。

- 行政資料室機能、文書蓄積、BMアウトリーチ?(病院、老健、幼保、学校、包括支援)
  - ・書庫容量、駐車場規模、他

◎ 図書館員から基本構想策定委員会につたえたいこと。

多摩市のライブラリーシステムのこれまでとこれから

「新たな本館ができたときに、地域館に求め続けられていくもの」 (唐木田・豊ヶ丘・聖ヶ丘・東寺方 地域館)

□ 基本的なあり方

- 今現在においても、多くの市民にとって行政というのはあまり興味のない存在だと思えますが、今後高齢化がますます進むと、市役所はますます遠い場所になると思えます。それを踏まえて、現在明確になっていないことも含めて、以下の3点が求められると思えます。
  - ① 新たな本館を含めた多摩市立図書館全体のランチであることを、今以上に実感できるよう、PRや人員を含めたサポートを本館が行う。(前提としては、地域館の職員を本館に集約することを行った上で、ということがある。) 職員、利用者とも、全体とつながっていることが感じられるように。
  - ② 行政のランチであることも、さらに強める必要があるのではないか。たとえば市の刊行物の配布や販売など、より明確に打ち出し、コンビ二的になる。不慣れた行政のランチ的な部分は、本部(本館)が支える必要がある。
  - ③ ①のように、資料については市立全館や都立や国立などがバックアップするという前提で、地域館の蔵書の本籍をある程度固定し、予算もある程度振り分け、**蔵書構成の自主性を持たせる**。それから、施設の問題で代替手段を考えざるを得ないときが来ると思う。そのときには、撤退した地域の小さなスーパーの代わりに、移動販売車が回っているように、自動車図書館も選択肢に入るのでは? 停車時間を以前より長く、半日停車すれば、以前のように40分しか停まらないよりは利用しやすいのでは。また、最近地域センターの空き店舗にできてきている宅配業者のサポートセンターのようなところの活用もありうるのでは。
- 日常生活の一部としてごく普通に使える身近な施設。新聞・雑誌のブラウジングコーナー、予約本受取、一般書、児童書ともに新刊書を中心とした品揃え
- 分館の役割とは何か、になるわけですが、本館をこのような位置づけにした場合、本館の業務の質や量が大きく変わってきます。本格的なレファレンスなどが増えれば、それだけ時間がとられますし、利用者が増加することになれば、細かい市民の意見やニーズへの反応がどうしても鈍くなりがちになります。これをカバーしていく役割を分館に持たせることができるのではないのでしょうか。**分館は利用者の数は少なくとも、利用者と物理的に近く、地域の情報なども入ってきやすい面があります。また、分館として存続できれば、そこには図書館の職員がいて、分館同士あるいは本館とのネットワークが残ります。そのつながりや人的資材を活用し、本館ではやりきれないアイデアや時間のかかる企画などを担うという位置づけに分館を持っていく**というのはどうでしょうか。コミュニティセンターや学校、児童館などに積極的にお話会やブックトークなどをしに行く拠点としてや、図書館利用教育、大きなテーマ展示などを分館それぞれで、この地域にどのような催しが必要か考え実行していくことができれば、**より地域に利用しやすい図書館の窓口**になっていけると思うのです。そして全体の取り組みのバランスは本館が取りつつ、取り組みに必要な資料の希望などを集めることで蔵書にも特色を付けていくことができるのではないかと思います。
- (本館などに比べて) 場所が狭い→全体を見回しやすい  
例えば…買物するのになんでも大型スーパーでは大変。気力、体力が必要。ちょっと買物に行くなら近くのコンビニや小売店が便利。図書館でも、何か目的があって調べ物などをするなら、大きな館に行きたいが、ちょっとプラリと立ち寄るくらいなら小さな図書館の方が使いやすい。また、小さな子どもを連れて遠い図書館に行くのは大変だが、近くならば小さな子どもと散歩がてら図書館に立ち寄ることができる。そして、地元の方が利用されることにより、地域のコミュニケーションの場としても利用できる。  
また、図書館という場所は、他の場所と違って  
「用事がなくても来館できる」  
「人とコミュニケーションをしなくても、自然にただ来て帰る」  
ことができる施設である。  
しかも公園などと違い室内なので、天候も気にせず来ることができる。  
また、当たり前のことではあるが、本は冊数が増える수록重くなるため、特に力や体力のないお年寄りや子供にとって**図書館が近いというのは借りる時はもちろん、返す時にもとても重要なこと**であると思う。  
なので、私が地域館に求められていると思うことは、  
「専門書ではなく、軽く何かを見たい時に立ち寄れる気軽さ」  
「**地元の図書館としての居心地の良さ**」  
「**近所の人とのふれあいの場所**」であると思われる。
- 古い団地の商店街では品数が限られ、買物客が減少し、売り上げも減った事から閉鎖した。民間であるから可能であった。公共な施設である図書館を閉鎖するには、反対者が出てくるのは予想できる。住民に対し十分説明し理解を求める必要がある。主たる図書館は、利便性の場所になる事は当然なものと考えられる。今後の方向性は、その考えから出て来ているものと思われま。
- 多摩市の規模に対して、図書館の数は多いと感じます。居場所が必要ということであれば、図書館である必要はないのではないかと
- 現在、地域図書館では、地域の小学二年生の図書館訪問を受け入れています。**地域館の職員は子供たちに図書館の使い方を教えると共に、本の楽しさを伝えるための工夫をして、図書館にまた来たいと思ってもらえるように取り組んでいます。子供たちが、徒歩圏内で一人で歩いて来ることができる場所**としての役割が地域館に求め続けられると考えます。
- **誰もが使える図書館**。小学生くらいまでは交通機関を使って図書館に自立で来ることは難しいが、徒歩圏内であれば、生活の一部として利用できる。
- 障がいを持った方、高齢者など、一人ひとりに配慮が必要な場合がある。規模が小さい分、目がいきとどき、より利用してもらえる図書館になる。
- 新たな本館が出来ても**地域館に求められるのは利便性**(今までと変わらず)だと思ふ
- 「日常」使いやすさ。安心して日課のように毎日通える。子どももお年寄りも足を運べる。「近さ」が必要。こまめに通うことにより、色々な本に触れ人生の糧を得る、視野を広げる。

- 地域館に求められるものは行きやすさ。特に**高齢者や子どもが一人で行ける場所**だということ。
- 地域図書館の利用者にとっては、本館のあり方で直接、影響を受ける事は少ないと思えます。とにかく存続する事を求める声を多く頂いています。(規模を縮小せずにという声もあります)
- **地域館の存在はデータだけでは計り知れない**。本を介して人と人のつながりが求められている。地域の環境(新たな図書館)が変化しても地域館は「心のふるさと」の役割を担っていかなければならないと思う。**高齢者にとって身近にある生涯学習とコミュニケーションを得る場所**であると思うので、この2点は求め続けられる
- 住民と共に在り続ける図書館 ○ 市職員の貌となる図書館
- 住民の皆様にて育て育まれる図書館員 **※拠点館・地域館に軽重など区別なし**

□ 蔵書資料について

- 本館には雑誌・新聞は置かず、**地域館の雑誌・新聞コーナーを充実させる**。  
→雑誌新聞は地域館でないとならぬので利用も必然的に増える。
- 予約の受取だけではない、**地域の要望に密着した書架**を作って置く(例：児童書、F小説、49医学、29旅行書、59家事育児等)
- 年配の利用者、育児中の母親と子どもを考慮すると、**絵本と新聞、雑誌の利用**は必要だと思います。
- 新聞雑誌の受入れ。予約本の受入れ。地図本の受入れ。
- 特色ある図書館づくり。**地域に合わせた本の収集**等。
- 居場所としての図書館だが、コミセンと共存しているところは予約の受け渡しと予約を受けるなどで良いと思う。新聞は置く。
- **増えていく高齢者の日常生活を支えるための情報提供の場**。
- **身近な情報提供機能**。生活圏内にある地域館では本の情報以外にもバスの運行時刻表など疑問に思った事を解決できる事が求められる。
- 身近で気軽に利用できる雰囲気と地域の需要に合わせた蔵書の充実。
- 新本館がオープンしてからの地域館の役割は主に**日常的な読書や楽しみのための身近な図書館**となることです。蔵書の構成の割合の見直しをはかり、小説などの読み物、実用書を中心とし、児童書も子供は少なくなる予想だが、ある程度は充実すべきと思う。
- 本館にはない特色を出す。全集や新着の本を集めて展示するなど。
- 気楽に読める小説や家事、医学などの本を揃えた本棚 ○ 利用者に合わせた書架作り。
- 新聞・雑誌の閲覧  
デイリー情報。雑誌は子育て世代、高齢者など対象を絞ってじっくりと揃える
- ポピュラーリーディング、実用書中心。**ノンフィクションは過去5年以内程度**。
- レファレンスブックは百科事典、動植物図鑑、語学辞典などベーシック、標準的なものとし、百科辞典以外の辞典類は貸出を基本する。
- 新聞を購入していない人が多いので、**新聞と雑誌の閲覧**ができるのは魅力だと思います。
- 子供の読書力、興味は多様である。子供にとって歩いていける場所に図書館があり、児童書だけではなく、一般書も含め、子供の個性に合った本に出合わせる環境を整備し、子供の自主的な読書活動を支援することは、**これからもさらに求め続けられること**だと思ふ。

□ 運営／職員について

- 地域館の職員体制を嘱託職員中心とし、研修制度の充実をはかってリーダー制を導入する。都立図書館、東公図の研修にも参加できるようにする。
- 本を借りるだけでなく、図書館へ行くことが目的(たのしみ)となる信頼関係
- 廃止縮小されることなくこれまでと同様に居心地のよいスペース・充実したサービスと蔵書だと思います。
- 雑誌、新聞、絵本を利用できるとし、予約本(リクエスト処理)がない分9時30分～5時の開館にする(30分早く開館する)
- **曜日によって(一日おきに)午前開館、午後開館でも良いのでは**。居場所にしてている方たちも、一日の半分使えればよいのでは。開館時間をずらして色々な人が通いやすいようにする。
- 開館日、開館時間の縮小

◎ 図書館員から基本構想策定委員会につたえたいこと。

多摩市のライブラリーシステムのこれまでとこれから

「新たな本館ができたときに、地域館に求め続けられていくもの」（唐木田・豊ヶ丘・聖ヶ丘・東寺方 地域館）

□機能/サービスについて

- あかちゃんおはなし会や読み聞かせを継続して実施し、**本との出会いや読書のきっかけづくり**をする
- 多世代交流の場であり**、地域の課題に沿った図書を提供していくための場。本の流通をよくするためにも**職員は必要**
- 中央館に機能集約し、**分館は縮小してもいい**と思う。予約資料の受取に特化した感じ→次世代の方々はITが生活の一部となっており、予約システム等も使いこなせるため
- 私は以前、板橋区の図書館に勤務しておりました。多摩でいう地域館レベルの中規模の図書館です。ある時50代くらいの女性に「えん下食について教えてほしい」とレファレンスを受けました。「そもそも、えん下って何？」という質問から始まり、「母を介護しなくてはならなくなったが、何からやったらいいかわからない。でもまず、ご飯はなんとかしなくてはいけない」ということでした。まず、介護関係の食に関する本、健康(49)の分野からの料理本、料理(59)分野からの病人食など様々な分野から本をご案内しました。それほど忙しいカウンターではなかったのですが、「他の図書館へ行った時は、この辺を見るといいですよ」と、請求記号のお話もさせていただきました。最後は「何から何までありがとう。助かりました。」と笑顔で帰られました。**分館だから、カウンターがそれほど忙しくない**ので、**ゆっくりお話を聞ける**。とことんレファレンスに答えるという対応ができると思います。そのようなことを地域館の強みにはできないでしょうか。
- (児童サービスの充実) 司書がきちんと本を把握し、展示を充実させる。子どもに読んでほしい本だけ蔵書にする。子どもたちの気軽な相談にのる。そのために、**児童書は「所蔵館にもどる」**にして、その館で選んだ本だけを蔵書にする必要がある。
- 身近な公共施設として**老若男女が集う場所**であり、おのずと**子どもがルールを覚える**ところ。
- 「市民との対話」対話から課題を引き出し、解決につながる本を紹介する。
- 貸出機、返却機だけでなく、人を配置すること**(コミュニケーションとれる場)**にすること。
- 利用者のレファレンスにとことん付き合うことができるのではないのでしょうか。拠点館ほど忙しいということはないと思いますので)
- 地域に根ざした接客。利用者とコミュニケーションをとる事により、その地域の人々を知り、また、必要としている情報や資料が何であるかを知り、地域のニーズに合った図書館づくりをする。
- 予約はできないとしても、**予約本の受取**はできるようにしてあげたい。
- 予約本の受け渡し場所、実用書と絵本を少し置く。小規模な「分室」のようなものでも良いのでは？
- 利用者の日常生活圏のスーパーやかかりつけ医のような役割で、**図書館のすべての受付窓口**
- 多摩市は坂が多く、自転車での移動は大変です。**遠くまで行くことのできない、お年寄、子どもにとって歩いて行くことのできる地域館**がなくなってしまうたら、図書館を利用しなくなると思います。
- その地域住民の年齢層や、まわりの施設との連携で、行事や生活にかかわり合った展示、催し物を行っていく。
- 子どもが楽しめる本読みのスペース**。親子で。小さな読み聞かせ、おはなし会。
- 「**近くに図書館がある**」ということが**求められ続ける**と思います。ベビーカーで地域図書館を利用してました。近くにあるから、思いつきでふらっと寄れる。図書館があるから、子どもと棚を見ながら本と出会えるし、「好きな本を〇冊選んできていいよ」という楽しみ方ができる。これが地域館の利点ではないでしょうか。携帯でおはなしが読める時代。地域の受取窓口があっても利用せず、拠点館まで足を運ぶことも少ないのではないかと思います。
- 地域館には**地域密着型サービスが求められ続ける**と思う。**顔の見える関係。親しみやすさ**。その地域の年齢層・生活にあった蔵書構成。
- 地域館の利用者はいつ行っても**顔の知っている職員がいる**ことに親近感を持っていると感じる。
- 新しい図書館が整備され、便利になるが、**すべての人が本館に行けるわけではない**ので、高齢者や児童サービスに今まで以上に力を入れていくことが求められる。
- 地域ごとの世代による利用ニーズを調べ、そのニーズに対応できるようなサービスの提供。(大切にしたいこと)スムーズな本の提供、人とのつながり、コミュニティー、居場所
- 地域館でのエピソード。利用者からこの折り方が出ている本を探したいと申し出があり、都立から折紙の本を取り寄せたが出ていなかった。後日、折り方がわかったとってお世話になったお礼の言葉とともに立派な折紙作品を届けにいらした。地域館では利用者との距離が近く、心温まるできごとも多い。
- 地域館の利用者の声で、以下のようなものが複数あった。本館が新しくできて、自宅からもそちらが近いので、一度は利用館を豊ヶ丘から本館に移したが、使い慣れた豊ヶ丘の方が使いやすいとのことで、豊ヶ丘に戻ってきたとのことでした。

- 図書館(建物)=社会学。地域の特色を考え、ソフト面(人的サービス)でのサービスが一層求められると思う。
- 生身の**本に“ふれる”** (電子ブック・ネットの普及の反動として需要・必要性が増す)
- 「調べもの」すぐ行って、足がかりを見つける。慣れ親しんだ司書がいて、子どももお年寄りも相談しやすい雰囲気がある→**各館である程度完結できる資料が必要**。**選書もできれば、各館で行いたい**
- 書架の縮小 フリースペースを増やす**
- 豊ヶ丘(地域館)と本館の**両方**を利用している人は多いです。滞在、予約は本館、予約本受取りは豊ヶ丘と**使い分けている**と思います。
- 中高生の勉強スペース** ○**幼児読み聞かせコーナー**
- (児童サービスの充実) 司書がきちんと本を把握し、展示を充実させる。子どもに読んでほしい本だけ蔵書にする。子どもたちの気軽な相談にのる。そのために、**児童書は「所蔵館にもどる」**にして、その館で選んだ本だけを蔵書にする必要がある。
- 図書館(地域館)でなくても集る場所に新聞・雑誌コーナーで十分。**規模は小さくても図書館の機能は必要**。**特に勉強スペース**(調べて話せるワークショップコーナー。規模は児童コーナーのみでもいい)。**自由に読み聞かせ、お母さん方が集り相談、談笑できるスペース**。
- 閲覧・立ち寄り 自由に来館、閲覧できる ○**居場所としての役割**
- 人的交流**(近所の人に会う、職員と会う) ○**高齢者の居場所**
- 居場所(コミュニティ)として主には高齢者に居場所が期待されているが、「居場所」は図書館に限定特化される機能ではなく、地域館存続の根拠として疑問がある。健幸まちづくりの視点からは、高齢者はシルバーパスを利用し出歩くことができるし、積極的に出歩くことを期待されているのではないか。むしろ、拠点館や本館に高齢者に魅力ある環境をつくる必要があるのでは。
- 児童サービスの充実 市民団体(よみきかせの会)や保育園・幼稚園、**地域内の子育て施設との連携。アウトリーチ活動**。
- 地域連携 コミュニティ施設としての役割 複合施設内の取り組みへの参加・協力、役割分担**
- 予約-受取-貸出 必ずしもセルフ化は必要ではない。量も限られむしろ人を介しての受け渡し(ふれあい・会話)が求められる。
- 地域情報**(市政・行政サービス情報、その他)に**アクセス**、入手する場。本だけでなくチラシ・パンフレットも。
- 新本館の分館(ランチ)。**新本館につなぐ**、新本館を中心とするサービスを浸透させる場所になる。
- 地域の諸々の団体の存在、活動をよく把握し**求められるサービスを日頃から用意する。
- 子育て・学校教育の現状をつかみ**、日常的に協力を深めていく。
- 図書館の内だけでなく地域の催し物にも地元と協力して参加すること
- 暑い日、寒い日も**快適な空間を提供**する。年金生活者は光熱水費を節約したいと思っている。
- 豊ヶ丘は、高齢者の多い地域なので、手間がかかるが、図書館の外に出て、宅配サービスや、公共施設なe t c他の場所に向いて催し物に積極的に参加していく必要があると思う。人手と手間のかかるサービスになるが、**福祉的なサービスの充実**は、利潤につながりにくいからこそ、地方公共団体として積極的に拡大していくべきだ。人件費の負担が問題となるが、もっと有効活用していくべき(私はやる気あります)
- 乳幼児とその保護者は、身近に図書館があることにより、読書コーナーでゆったりと絵本を楽しむことができる。通い慣れた図書館のおはなし会に参加することにより、また読書相談等とおして、**子育てを支援することにつながっている**。きめ細かい子育て支援が求められる中で地域図書館に求められる役割は増していくと思う。
- 多摩市発行の『公共施設の見直しと将来像vol.1.3』に、ひじり・からきだの”残していきます”に市民の方は大変喜んでいらっしゃいます。サービスを精査し、**予約本の受け渡しだけでは図書館とはいえません**。**本と市民、市民と地域をつなぐのが分館の役割**ではないでしょうか

□その他

- 建物の維持存続が困難である以上、地域館というあり方以外の拠点も考えられる。既存施設(コミュニティセンター等)内での「配本所」も考えたい。3000冊程度の蔵書と自動貸出、予約の受取り。定期的な入れ替えと職員の訪問サービス。

◎ 図書館員から基本構想策定委員会につたえたいこと。

多摩市のライブラリーシステムのこれまでとこれから

「新たな本館ができたときに、拠点館はどう変わるか」 (関戸・永山 拠点館)

□ 基本的なあり方

- 駅のそばであること、通勤通学の帰路に寄れることを、より強く出す必要があるのではないかと。世田谷区などは、図書館は駅の近くにはないが、駅のそばに蔵書のないサービスポイントがあり使われている。ただし、時間延長すると人件費の問題も出てくるので、予約図書を受取などで、遅くまで対応できる手段を考えてみては。
- 中央館に機能集約することによって、ピラミッド構造の中間にくるイメージで、現在よりは縮小してもいいと思う。ただ、立地の良さがあるので、蔵書数に関しては維持してもいいのかと思う。
- 拠点館についてですが、上記、本館の部分で少し述べたように、現在、拠点館と本館で中央館的な機能がばらされているような状態になっているかと思えます。これだとしても情報が集約されにくかったり、特性を付けにくい点などがあるかと思えますので、やはり拠点館という考え方を一度白紙化し、本館と分館という2つで考えていった方が、構成としては良いように感じます。
- 図書館の数が少なくなったら、尚更3年・4年で嘱託職員が異動になる必要があるとは思えないのですが、多摩市図書館全体の知識を養うより、その館のスペシャリストになる方が、市民へのサービスは大きくなると思えます。他市で異動を行っている話は聞いたことがないです。
- 新しい本館ができるにあたって、この機会に色々なルール等の見直しが必要という意見が数件あり
- 変わらないと思う。変わるとすると、本館が変わって中央館としての意味を持つ時だと思う。
- 新本館の立地場所は駅前とは言い難いため、引き続き駅前にある拠点館(関戸・永山)には駅前図書館としての役割(夜間開館等)が求められると考えます
- 拠点図書館  
新本館を中心とするネットワークにおけるエリア図書館  
関戸・・・都市計画マスタープランの第1地域、広域拠点・連携拠点に立地  
永山・・・都市計画マスタープランの第5地域、広域拠点・連携拠点に立地
- 駅近くの利便性を生かす  
(新本館-各種サービスの拠点)
- 所蔵する資料が各館ごとに多少、独自性を持っているあり方を変えた方がよいと思えます。  
(各館の収納力もあって難しいとは思いますが)。それと本館が新しくなることによって、拠点館・地域館の利用者に不利になることがなければ良いと思えます。
- 新たな本館ができ、新サービス等を行えば一時的に拠点館の利用者も本館へと流れると思うが、大多数は現在利用館を利用するのではないかと思う。より専門的な分野を本館で展開すれば、それを欲している人は本館を利用すると思う。
- 住民と共に在り続ける図書館
- 市職員の貌となる図書館
- 住民の皆様が育て育まれる図書館員  
※拠点館・地域館に軽重など区別なし
- 本館は多摩全体の発信の場なので、児童サービス、障害者サービス、市民から図書館へのレファレンスだけでなく、図書館から市民へのコンシェルジュではなくてはいけないと思えます。

□ 蔵書資料について

- 蔵書構成の見直しは必要。たとえば永山は参考図書が一番多い(現状)ので、半分くらいに減らして新しい本館に集め、空いた書架はティーンズコーナーにして一般書と児童書をつなぐ場にするなど。
- 新たな本館ほどではないにしろ、資料数(特にR本)を各拠点館に新しい物を置き、種類を充実させる。
- 資料に本籍を設定し、各館の蔵書構成を検討すべき
- 基本的に公序良俗に反しない限り、リクエストは受けているが、一時の流行の芸能関係、イラストエッセイ等は断るべきだと思う。蔵書にすべきではない。
- 誰もが使える図書館。駅前の利便性は健常者だけでなく、障がいのある方、お年寄りにも来やすい所という面がある。利用できる資料を充実させる
- 拠点館の特色を出した書架作り。  
例) 本館→all  
永山→旅行・健康・生活・小説 児童調べもの・絵本  
関戸→倫、旅行、医、生、言語、小説
- 蔵書に特色を出し、本館との差別化を行う。例えば永山は大学病院などが近くにあるが、医学の本が少ない。参考資料も含めて、医学分野の本を充実させる。

○ 新本館ほどではなくても、そこそこのレファレンス機能で、地域の住民の助けとなるような拠点館

○ 新聞・雑誌の閲覧  
デイリー情報。雑誌は、精査したうえでタイトルは現状維持。各分野、各世代向けの充実を図る。永山の一部は新本館に移行。精査し、関戸と同程度にする。

○ 電子ブック・ネットの普及の反動として需要・必要性が生じる各分野をブラウジングし、比較選択できる程度の幅広さを持たせる。ノンフィクションは過去10年以内程度。

○ レファレンスブックを含めた蔵書の適量化  
永山への優先配置、関戸開館時の充実(国歌大観や群書類従)を新本館へ移動。蔵書を減らし、見せ方を工夫し、本の魅力をつくる。

○ 専門書をしっかり揃えて、ここに来れば解決できるようにするのが理想。

○ 調べ物に利用する資料をまとめて閲覧できるように、3館(本館、関戸、永山)により多く集中させる。そしてバラバラにしない。

○ 913.6や娯楽書の貸出が多い館なので、思い切ってそのスペースを大幅にとり、かなり大胆な書架配置にかえていくこともありと思う。

□ 運営／職員について

○ 新しい環境に移ることで、利用者のニーズにも変化があると思えます。なので、情報交換や利用者への情報発信の役割は、これまでより更に重要になってくると考えます。

○ 拠点館の職員体制は嘱託職員の比率がアップするが、責任を伴うリーダー嘱託が必要となる。対外的な研修への参加も可能とする。

○ 拠点館は地域館がなくなった場合は、その分の利用者が流れてくるので、開館時間が長くなった方が良いのでは。土日も19:30まで開けるとか。

○ 拠点館などでは、夜間に来る方は予約の資料を受け取るだけで帰ることが多いと考えられるのでICタグなどにより自動受取棚を作り、遅くまで受け取れるようにする。

○ 駅前の図書館は、平日も会社帰りに利用できる様に時間帯を現在より長くする。

■ 皆様から提出された意見カード

The image shows several handwritten cards with Japanese text. The cards contain various suggestions and opinions from library staff and members. Key points include:

- Card 1 (Top Left):** Discusses the role of branch libraries, suggesting they should have specific collections (like local history or children's books) and better staff training. It mentions the importance of having a dedicated staff member at each branch.
- Card 2 (Top Right):** Focuses on collection management, suggesting that branch libraries should have more specialized collections and that the main library should focus on general collections. It also mentions the importance of having a dedicated staff member at each branch.
- Card 3 (Middle Left):** Discusses the importance of having a dedicated staff member at each branch and the need for better training and support for these staff members.
- Card 4 (Middle Right):** Focuses on the importance of having a dedicated staff member at each branch and the need for better training and support for these staff members.
- Card 5 (Bottom Left):** Discusses the importance of having a dedicated staff member at each branch and the need for better training and support for these staff members.
- Card 6 (Bottom Right):** Focuses on the importance of having a dedicated staff member at each branch and the need for better training and support for these staff members.

◎ 図書館員から基本構想策定委員会につたえたいこと。

多摩市のライブラリーシステムのこれまでとこれから

「新たな本館ができたときに、拠点館はどう変わるか」 (関戸・永山 拠点館)

□機能/サービスについて

- 基本的に生活の中で読書を楽しみ、知る自由を保障する施設。以前と比べ滞在型の利用が増えているので**座席の拡張**が望ましい。**ICタグを導入する場合は、夜間・休館日等予約本の受取を可能とする。**
- 本館には児童、YA、ビジネスマン用に学習スペースを設け、拠点館には地域に密着した高齢者向けのサービスを充実させる。
- 2館とも駅、商業施設が近い。本館や地域館と違い「ついで」で立ち寄れる図書館。レファレンス等は本館に任せ、もっと手に取りやすい本や絵本などを中心にしてみては。
- 新本館は駅から遠く、京王線からも遠い。子供、お年寄り、障害者、車を持っていない人に利用しやすい拠点館としてサービスに力を入れる
- 駅からのアクセスが良いので通学、通勤の方の利用が望まれる。
- 本館の様なパソコンを使える区切られたスペース**を作ってみると学生等の利用があると思われる。
- 利用者も育てていくことができる図書館へ（自ら検索したり、レファレンス資料を見たり等）
- 永山は日医大も近いので障がい者サービスを続け、関戸は昔のように児童サービスの充実を計り、各拠点館の色を明色にする。**
- 障がい者サービスを新本館に担当となったとしても、駅前拠点館である関戸、永山の機能はさほど変化しないと思います。
- レファレンスを新本館に持っていけば、不便を感じる関戸・永山利用者が出るかもしれないと思います
- 新本館の規模、機能をどうできるかによって違うが、関戸・永山の存在意義は今とあまり変化しないのではないかと
- 障がい者サービスも含め、すべてのサービスを集約した図書館
- 拠点館は**本館との連携を今まで以上に強く**していき、サービスの向上をはかっていくことになる。たとえば、障がい者サービスなど。本館が仕事のメインになるが、利便性の高い拠点館でのうけわたし、またサービスのサポートや図書館の宣伝などがより重要になるはずである。
- 駅近であることから、通勤・通学者への手厚いサービスを充実させる
- 本館ができたからといって永山や関戸を利用する人にとってはあまり影響がないと思うのですが、今以上のサービスと蔵書の充実を求められると思います。それに応えるように進化していかなくてはならないと思います。
- 新しい本館になることで、今以上に利用者へのサービス向上が望めるのであれば、本館に負けないぞという気持ちが生まれ切磋琢磨し、各館の奉仕活動に変化が出てくるのではないのでしょうか。
- 地域館と比べて蔵書が多いだけでなく、ある程度の調べものが出来るレファレンス機能は残る館で特色付けをする
- 拠点館は駅前に立地していることから新本館ができて、利用者の数はほとんど減少しないと見込まれる。そのためレファレンスブックの数は減少すると思うが、**現在と同規模の蔵書数・レファレンスサービスの体制は必要と考える。永山図書館は障がい者サービスを本館に移し、学習スペースの増を計る。**
- レファレンス機能。特に永山は本館を充実させる分、本は縮小させることになるが、利用者が多く調べ物に来館されている方が多いことから、ある程度のレファレンス機能は必要
- 新本館にレファレンスブックがひきあげられてしまったら、蔵書構成が変わっていかざるをえないが、レファレンス機能は拠点館にひき続き求められるので、基本は変わらないと思う。
- 新本館より拠点館の方が利便性で勝るのであれば、あまり変わらない。
- 特に変わるとは思わない。
- 機能の集中と分配。役割分担、あるいは特色が明確化されるが、ここでもソフト面での充実と各館の連携が大切になると思う。
- 障がい者サービスの内部事務は本館に移すが、録音室・対面朗読室、バリアフリー資料などは拠点館にも残し、利用を充実させる。啓蒙、PRの意味も。
- 本館が中央館の機能があるなら、障がい者サービスは本館へ集め、利用時間の変更など
- 永山図書館でもっている障がい者サービスの仕事が新本館に移ったら、障がい者サービスの備品類が少なくなり、部屋(パソコン点読室)が空くと思うが、今事務机とボランティアの打ち合わせスペースが競合しているのが解消されると思う。対面室3として使用することも考えられる。
- 地域情報(市政・行政サービス情報、地域の活動やイベント情報を得る場所。本だけでなくチラシ・パンフレットも。

- 全ての館で永山同等の障がい者サービスが受けられる
- 生身の本に“出会う”場。(電子ブック・ネットの普及の反動として需要・必要性が増す)さまざまな分野の蔵書に出会い、借りるために選べる場。
- ニュータウン地区には永山と新本館があり、既存地区には関戸のみ。**拠点館の関戸を現在より縮小することはやめてほしい。**
- 閲覧・滞在機能の充実  
自由に来館、長時間滞在可能。各世代、各目的による滞在環境の向上が求められる。
- 児童サービスの充実を図る  
市民協働によるおはなし会の充実。展示やイベントの充実。フロアワーク。**市民団体(よみかかせの会)や保育園・幼稚園、地域内の子育て施設との連携。アウトリーチ活動。**
- 対話型サービスの充実  
・レファレンスサービス・フロアワークレファレンス  
・企画展示・随時展示の充実  
・市民企画展示など
- 予約受取貸出  
自分でできることは自分で。マンパワーは対話型サービスに振り向ける。
- ティーンズサービスの充実  
→本より居場所(たまり場、活動の場か)

□その他

- 貸出点数は、無制限でよいのか
- ゆっくり調べ物ができるように**広い閲覧席**が必要だと思います。

□全域分館から新本館のあり方について

- 他機関と連携して高齢化社会に向けた健康情報やビジネス情報の発信、バリアフリーの施設。
- まず本館を今のまま移行するのでは、中央館としての役割が不十分ではないかと思うところから始めたいと思います。中央館を建てる場合、おそらく一番期待される機能は『ここへくればほしいのことは解決できる』機能だと思います。**現在の本館はレファレンスの拠点館である永山や、行政資料をまとめてある行政資料室に資料が分散していて、多摩市の事・土地の歴史の事などベーシックなレファレンスを持ち込まれてもその場では解決できない場合が多々あります。**この状況をやはりこのまま移行してはいけないのではないかと思うのです。また拠点館という考え方のもと、重要な資料が本館・関戸・永山に分散してしまっているのもやはり不便さが否めません。そうするとやはり、新本館を建てる際には、永山のレファレンス資料と行政資料室の灰色文献を新本館に集約し、**本格的なレファレンスにも対応できる資料形態をそろえておくべきか**と思うのです。また、正職員も本館を中心に配置されています。それを考えると、新本館はレファレンスや、資料構成の管理、システムの根幹を担う役割を果たすような位置づけにしていける方が生きていくのではないかと思います。
- 多摩市の現在の図書館の状況ですが、働いている者の感覚的には**本館・拠点館・分館ともに、蔵書の規模や来館者の人数は違えど、やっている仕事の実態はほぼ同じ事**をしているように感じます。また、館ごとの持つ雰囲気もほとんどかわるところがないように思います。**蔵書の固定がない**ということで、**蔵書構成の特色がつけにくいという事も影響しているか**はと思います。本館にしても、正職員がある程度揃って内部業務の拠点になっている、という点以外、開架の状況や利用者の利用方法などを見ている限り、分館とほぼ変わらないような状況になっていると思います。つまり、大小の差はあれど、**同じような業務をしている図書館が多摩市には8館ある**、というように見えるのです。

■ 皆様から提出された意見カード

